発達障がいの児童支援について

～巡回指導を受けて～

高槻市立西大冠小学校　　岡田　麻友子

1. はじめに

高槻市では、発達障がいのある児童生徒の指導の充実を図るために専門家とリーディングチームによる巡回指導（ペアサポート事業）が行われている。児童が支援学級で学んだことを通常の学級で活かすことができているか検証することで、通常の学級のユニバーサルデザインの充実を図ることを目的としている。苦手なことに対して気持ちが向きにくく、通常の学級では落ち着かないことが多い児童にどのような支援をしていくか、前任校において年間を通して 4 回の巡回指導を受けて学んだことを紹介する。

2. 支援学級の構造化の見直し

（１）物理的構造化

最初に支援学級の物理的構造化の見直しを行った。「一人で学習（写真１）」「先生と学習（写真２）」「みんなと学習」「リラックス（写真３）」「着がえ（写真４）」のそれぞれのコーナーを動線や学習体制をふまえて設定し直した。また棚の上に置かれた教材や自立課題が視覚刺激にならないように収納し、カーテンや衝立で不必要な情報などの刺激の抑制を行った。

支　援　学　級　構　造　化　　BEFORE

AFTER

（写真１）「一人で学習」エリア

（写真２）　「先生と学習」エリア

（写真３）「リラックス」エリア

（写真４）「着がえ」エリア

（２）時間の構造化・段取りの構造化

「いつ」「どこ」「何を」の情報を伝えるスケジュール提示（時間の構造化（写真５））や「何を」「どのくらい」「どうなったら終わりか」「終わったら何をするか」の情報を伝えるワークシステム（段取りの構造化（写真６））についても見直した。今まで使用していた情報提示が児童の認知理解や行動特性に合わせたものになっているか、「認知理解と行動特性の評価シート」を活用し、評価をしながら再調整を行った。

（写真５）個別的のスケジュール

（写真６）ワークシステム

構造化された支援の中でも、再評価、微調整を繰り返し、継続的な再構造化が大切であると知った。今まで声かけや介助により行動していた児童が、今何をするべきかが分かり、一人で出来ることが増えていった。「わかる」「できる」ことで安心と自発性が高まるとともに注意や指示が減り、褒める機会が増えることを実感した。

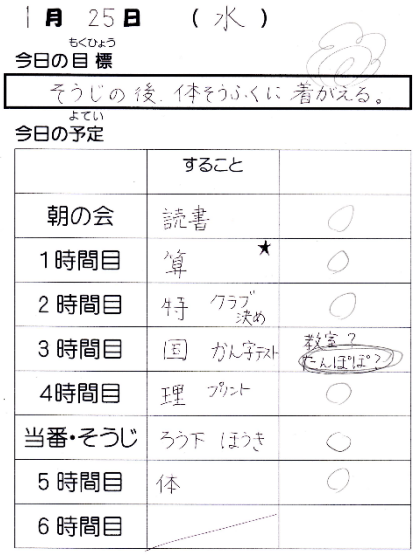
3. 通常の学級の構造化の見直し

（１）物理的構造化・時間の構造化・段取りの構造化

クラスの子どもたちと過ごす通常の学級では、基礎的環境整備として、「今日の予定」を前方に掲示、「明日の予定」は側方に掲示している（写真７）。全校６学年とも共通の時間割りボードを使用しており、教科、学習内容、学習場所を確認できるようにしている。急な予定の変更への不安を軽減するために、それぞれの児童の理解に合わせた個別のスケジュール（写真８）を準備することと、「今日の目標」を毎朝、児童と一緒に考え設定し、トークンエコノミー法（写

真９）で一日をふり返るようにした。当日の予定変更については、毎朝通常の学級担任と確認し、個別のスケジュール（写真８）を見せながら児童に予定を説明した。そうすることで、予定の変更を受け入れられるようになった。担任は、今日の授業の流れを黒板に提示し（写真１０）見通しを持てるようにしていた。加えて座席の配慮をすることや、出来上がりの見本を用意することなどの準備を行っていた。

（写真 7）今日と明日の時間割



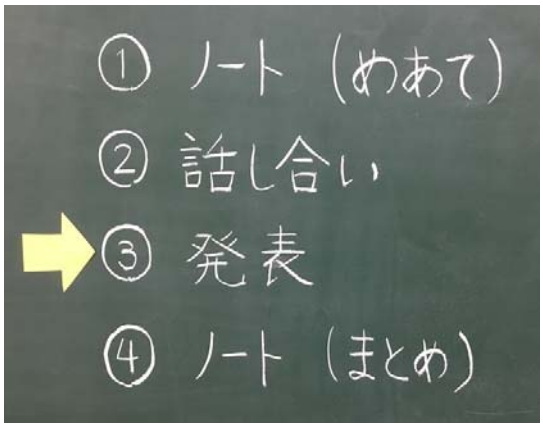
1月 25日 （水）

今日の目標

そうじの後、体そうふくに着がえる。

今日の予定

	すること	
朝の会	読書	○
1時間目	算 ★	○
2時間目	特 クラブ決め	○
3時間目	国 かん字テスト	教室？ たんぽぽ
4時間目	理 プリント	○
当番・そうじ	ろう下 ほうき	○
5時間目	体	○
6時間目		



（写真１０）授業の流れ

（写真８）
個別のスケジュール表

（写真９）
トークンエコノミー表

（２）合意形成によるルール作り

児童にとって分かりやすい環境を整えることや個別の支援を行う中でも、通常の学級でみんなと一緒のことを学習するには限界があり、「何をしたらいいのかが分からない」「聴覚が過敏で周囲の声に反応しイライラしている」「友だちとのトラブルを引きずっている」「自分の気持ちの伝え方がわからない」などの理由から問題行動が生じていることもあった。そこで、教室で落ち着かない時は、支援学級の「クールダウンコーナー」に行けるように、ルール作りを行

った。こちらが決めたルールを示すのではなく、クールダウンの方法や行動について児童と相談しながら決めていくことようにした。

新しいことを始める時に不安が大きくなり抵抗を示す児童には、学習の方法についても合意形成して決めていく必要がある。通常の学級で落ち着いて学習するためには、個別課題を準備し、支援学級のワークシステムを教室にも導入した。支援学級で活用している「ワークシステム」を通常の学級にも用いることで、落ち着いて共に学習できる時間が増えた。また授業の中身によっては、途中から授業に参加したり、担任や友だちの声かけで同じ課題をしたり、一人学習をしたり、バランスを取りながら学習を行っていった。

4. おわりに

通常の学級で落ち着いて学習に向かえない児童に対して、その行動だけに着目して指導をしても解決につながらない。児童の認知理解や行動特性を評価することで、その行動の背景にある児童の不安や混乱が理解できるようになる。同時に物理的構造化、時間の構造化、活動の段取りの構造化を再度見直しすることが大切である。児童にとって分かりやすい環境を整えることは、自立につながる。指示や注意をし続けなくても行動できることは、達成感や自己肯定感を育むことにつながる。そして再評価、構造化の微調整を繰り返しながら、より安心して過ごせる環境を追求していくことが大切である。刺激の少ない支援学級で学習やコミュニケーションの方法を学び、通常の学級にも活かしていくことは有効である。ただし、通常の学級で共に学ぶ場合、基礎的環境整備や、合理的配慮が必要である。みんなが同じ方法で学ぶことを課すのではなく、誰もが違う学び方をすることを前提として通常の学級での学習の方法も模索していく必要があることを巡回相談で学んだ。必要な基礎的環境整備や合理的配慮について教職員全体で共通理解し実践することや、担任が変わっても同じ意識で支援を継続することは今後の課題である。